

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）・
ベネッセ教育総合研究所 共同研究

「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクト

乳幼児の生活と育ちに関する調査 2017-2021

0歳～4歳

【ダイジェスト版：データ集】

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）とベネッセ教育総合研究所は、子どもの成長のプロセスを明らかにするための縦断調査（追跡調査）を共同で進めています。
本冊子は、0歳児期から4歳児期の調査の主な結果をまとめたものです。



● 内容 ●

1. 子どもの生活と発達…………… p.5
生活リズム／遊びの時間／メディアの時間／メディアとのかかわり／
認知的な発達／社会情動的な発達
2. 保護者の生活と子育て…………… p.13
家事と子育ての時間／子育てに対する意識／教育観・家族に対する価値観／
子育ての相談先／保育環境への評価／働き方／職場環境
3. 乳幼児期の子どもの育ちを支えるために……………p.21
保護者のかかわりと子どもの発達／母親と父親の相互作用の変化

2023年7月



ベネッセ教育総合研究所

■調査概要

- **目的** : 2016年度に生まれた子をもつ保護者に、年1回の追跡調査を行うことで、子どもの生活や発達と保護者の子育ての変化を知り、よりよい子育て支援を考える。
- **方法** : 郵送法(自記式質問紙調査)
- **時期** : 2017年9月～10月(子どもの年齢:0歳6か月～1歳5か月)から毎年9月～10月に実施
- **対象** : 2016年4月2日～2017年4月1日生まれの子どもをもつ家庭 3,205世帯(調査モニター)から開始

	0歳児期 (0歳6か月～1歳5か月)		1歳児期 (1歳6か月～2歳5か月)		2歳児期 (2歳6か月～3歳5か月)		3歳児期 (3歳6か月～4歳5か月)		4歳児期 (4歳6か月～5歳5か月)	
発送世帯数	3,205		3,021		2,673		2,245		1,898	
回収数	主	副	主	副	母	父	母	父	母	父
	3,005	2,750	2,554	2,390	2,356	2,232	2,057	1,949	1,738	1,644
回収率	93.8%	85.8%	84.5%	79.1%	88.1%	83.5%	91.6%	86.8%	91.5%	86.6%
分析対象数※	2,975	2,624	2,409	2,038	2,119	1,754	1,906	1,537	1,678	1,308

※0歳児期からの継続サンプル。

- **地域** : 全国
- **内容** : 子どもの気質、アタッチメント、発達、生活時間、習い事、養育者の養育行動、配偶者との関係性、家事・子育ての分担比率、子育てで頼りになる人、幸福感、抑うつ、家事・子育ての負担感など
- **研究プロジェクトのメンバー** :

- 東京大学大学院教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター(CEDEP)
遠藤 利彦(センター長・教授)
野澤 祥子(准教授)
大久保 圭介(特任助教)
則近 千尋(東京大学大学院博士課程)
江見 桐子(東京大学大学院博士課程)
唐 音啓(共愛前橋国際大学助教)*
*研究プロジェクトメンバーとしては2022年3月まで

- ボード会
秋田 喜代美(学習院大学教授)
佐藤 香(東京大学教授)
島津 明人(慶應義塾大学教授)
小崎 恭弘(大阪教育大学教授)

- ベネッセ教育総合研究所
野澤 雄樹(所長)
高岡 純子(主席研究員)
松本 聡子(研究員)
木村 治生(主席研究員)
李 知苑(外部研究員)

基本属性

※ 4歳児期調査時

子どもの性別	男子	女子	無答不明
	50.1	49.8	0.1

※ このページ以降、「父親」「母親」と明記していない表・グラフは、すべて母親（1,678名）回答。
 ※ 以下の数値は、構成比率（%）を示している。

子どものきょうだい数	1人(ひとりっ子)	2人	3人	4人	5人以上	無答不明
	19.8	55.2	20.4	3.6	0.7	0.2

子どもの出生順位	1番目	2番目	3番目	4番目	5番目以降	無答不明
	50.6	36.2	11.3	1.3	0.4	0.3

子どもの月齢	4歳6か月	4歳7か月	4歳8か月	4歳9か月	4歳10か月	4歳11か月
	8.2	5.8	8.3	8.6	9.0	10.6
	5歳0か月	5歳1か月	5歳2か月	5歳3か月	5歳4か月	5歳5か月
	8.9	9.1	8.8	7.6	7.6	7.4

保護者の平均年齢	母親	37.1歳
	父親	39.0歳

保護者の最終学歴		中学校	高等学校	専門学校 各種学校	短期大学	大学 (四年制・ 六年制)	大学院	その他	無答不明
	母親	1.6	16.7	18.4	14.8	44.3	3.7	0.1	0.4
	父親	2.3	21.3	12.9	1.9	48.3	11.1	0.7	1.5

居住地域	北海道・東北	関東※	東京	中部	近畿	中四国	九州・沖縄
	4.7	25.3	13.2	20.7	18.4	7.0	10.8

※東京以外

子どもの就園状況(%)

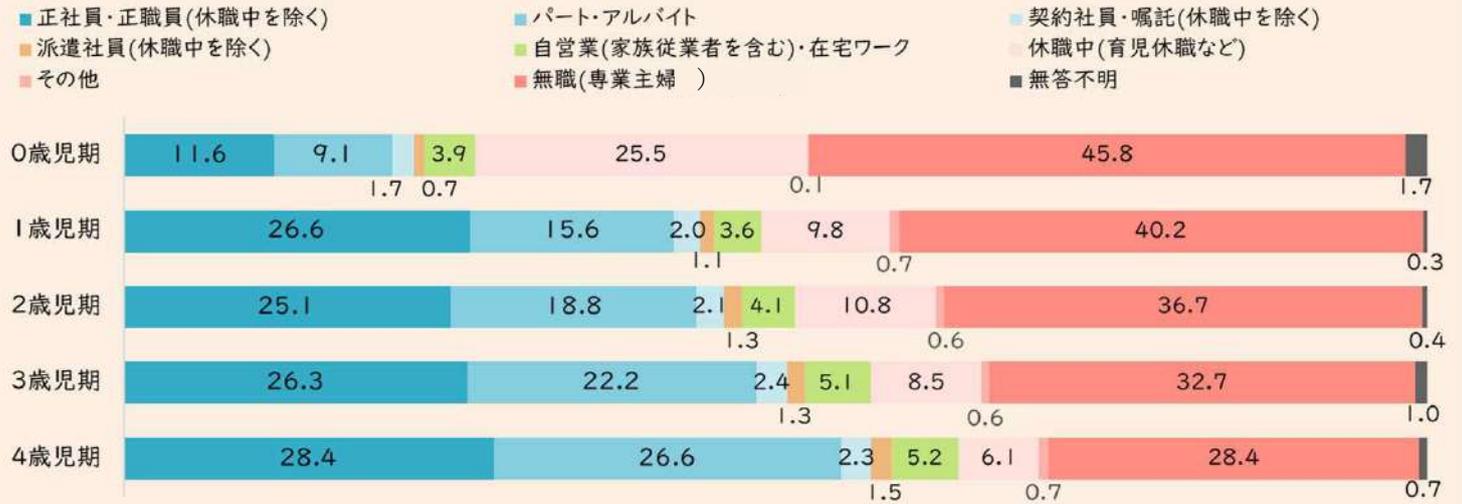
- 園や施設には通っていない
- 幼稚園
- 保育所(認可外保育施設、小規模保育室を含む)
- 認定こども園
- その他の園・施設(保育ママを含む)
- 無答不明



■基本属性

- 子どもが成長するにつれて就業する母親が増え、4歳児期で70.1%に達した。とくに、「パート・アルバイト」が増え、「専業主婦」が減った。世帯年収も、子どもが成長するにつれて、増えているのがわかる。

母親の就業状況(%)



世帯年収(%)



1. 子どもの生活と発達〈要約〉

●生活リズム (p.6)

1歳児期から4歳児期まで、起床時刻と就寝時刻は、ほぼ変化しないが、昼寝時間は減り、4歳児期で「しない」が50.0%になる。

●遊びの時間 (p.7)

外遊びの時間、絵本の読み聞かせは1~4歳児期にかけて減少していく。

●メディアの時間 (p.8)、メディアとのかかわり (p.9)

幼児期にスマートフォン、タブレット端末、ゲーム機を利用する子どもは全体的に少ない。4歳児期でもっとも利用するアプリやソフトは、「動画(子ども向け娯楽用)」で74.8%。利用させる理由は「子どもが使いたがるから」が73.0%。

●認知的な発達 (p.10)

全体的に、2歳児期から4歳児期にかけて認知的な発達の変化が大きい。2歳児期から4歳児期にかけて言葉遊びができるようになり、語彙や表現を豊かに育んでいるようだ。また、日常生活のなかで自分の体や身の回りの物を使って数を数え、長さや重さの順や物事の対比を少しずつ判断している。

●社会情動的な発達 (p.11~12)

2歳児期から4歳児期にかけて少しずつ発達している様子がうかがえる。とくに「自己抑制」や「協調性」は、年齢が上がるにつれて高くなり、他者の状況を意識した行動が少しずつとれるようになるといえる。また、「がんばる力」では、ねばり強く取り組む力を徐々に身につけていくと思われる。また、「積極性」は、友だちとかかわるなかで、少しずつ自分の気持ちを伝えられるようになる様子がうかがえる。

生活リズム

1歳児期から4歳児期まで、起床時刻と就寝時刻は、ほぼ変化しない。
 4歳児期の76.9%が「7時半頃」までに起床、74.8%が「21時半頃」までに
 就寝している。また、昼寝時間は減り、4歳児期で「しない」が50.0%になる。

【図1-1】

起床時刻 (%)



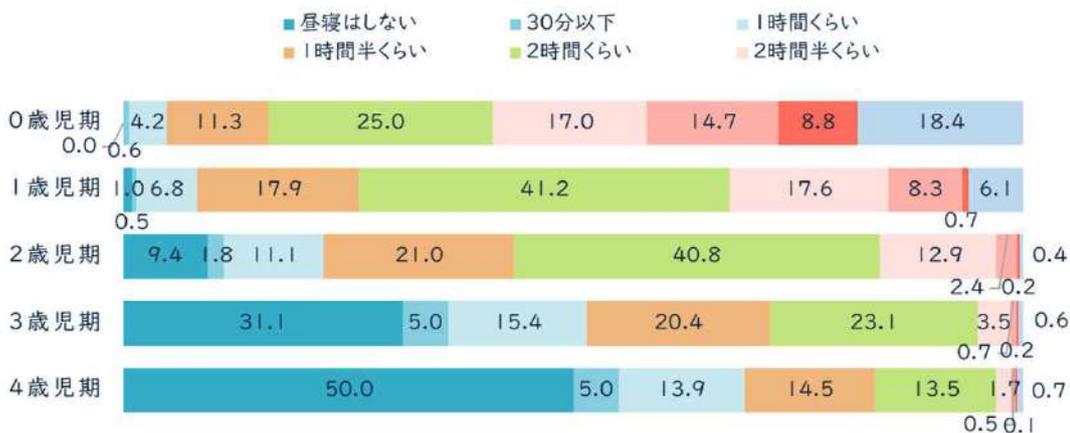
【図1-2】

就寝時刻 (%)



【図1-3】

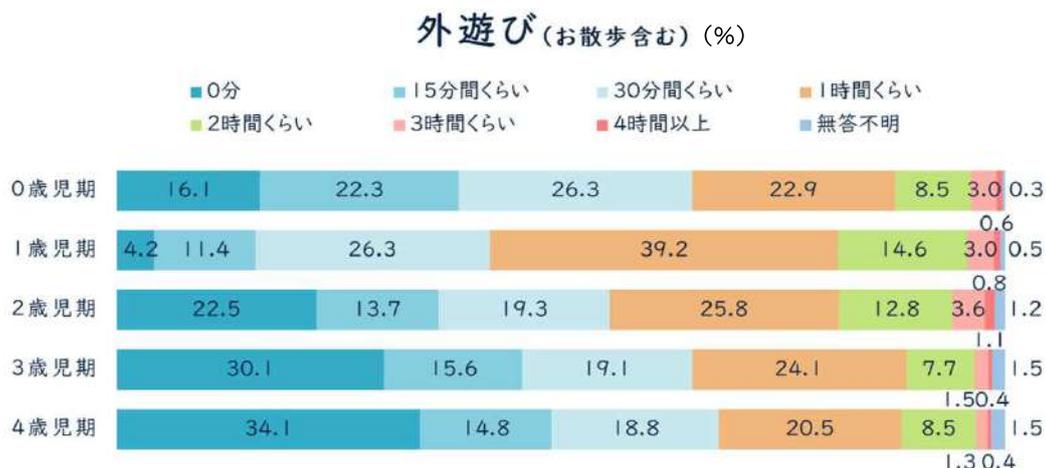
昼寝時間 (%)



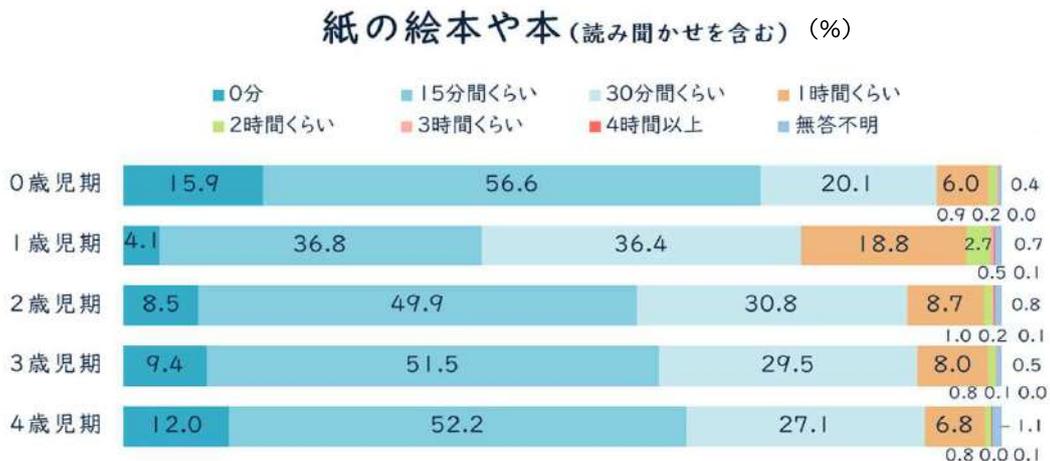
遊びの時間

外遊びと絵本の読み聞かせの平均時間をみると、年齢が上がるにつれて減少する。外遊びでは「0分」の回答が増え、4歳児期に34.1%になる。絵本の読み聞かせでは、2～4歳で約半数が「15分間くらい」と回答。4歳児期のテレビやDVDの視聴時間は、57.9%が1時間以下（0分は除く）と回答。

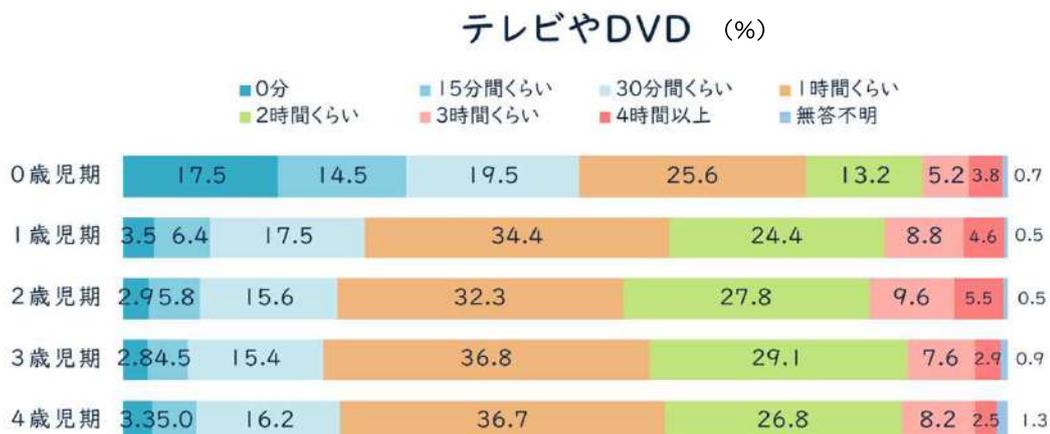
【図1-4】



【図1-5】



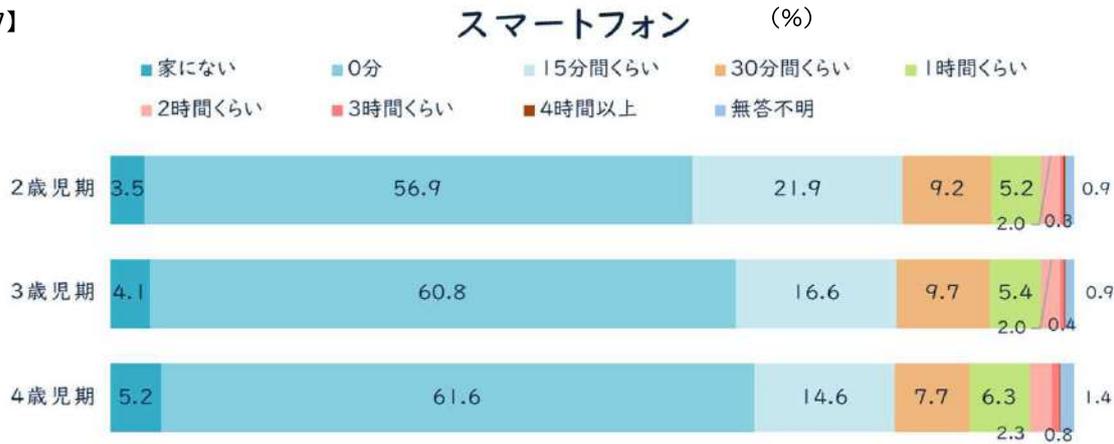
【図1-6】



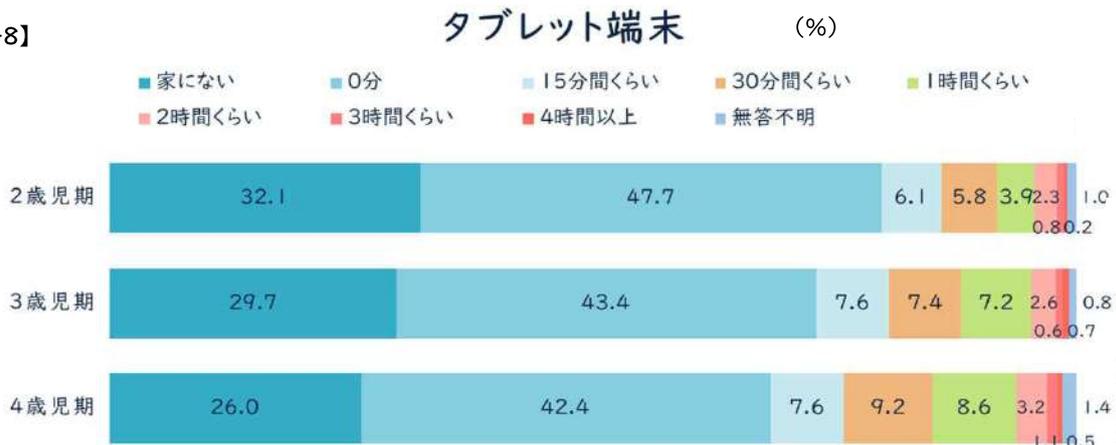
■メディアの時間

幼児期にスマートフォン、タブレット端末、ゲーム機を利用する子どもは全体的に少ない。4歳児期で利用していない子どもはスマートフォンで66.8%、タブレット端末で68.4%、ゲーム機で79.2%（「家がない」と「0分」の合計）。

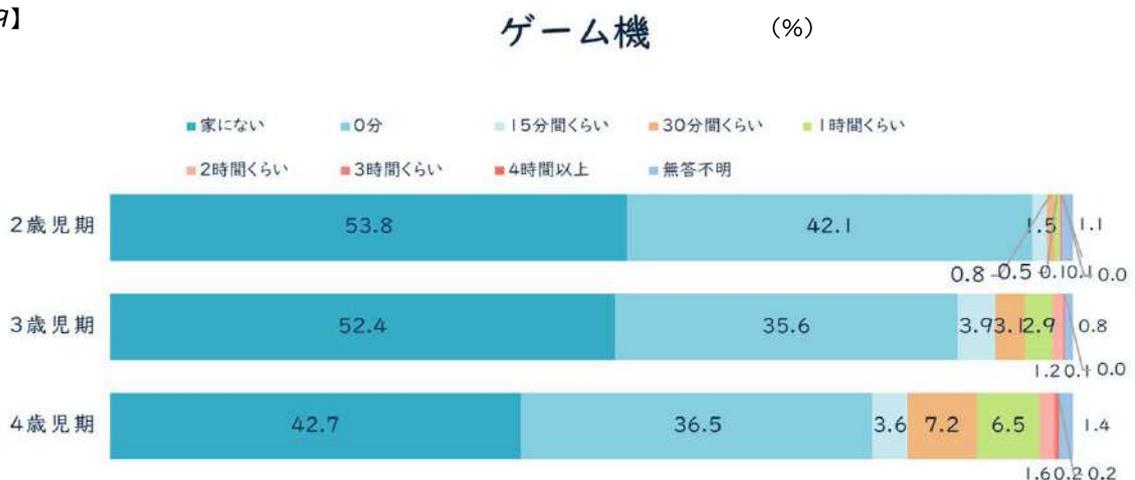
【図1-7】



【図1-8】



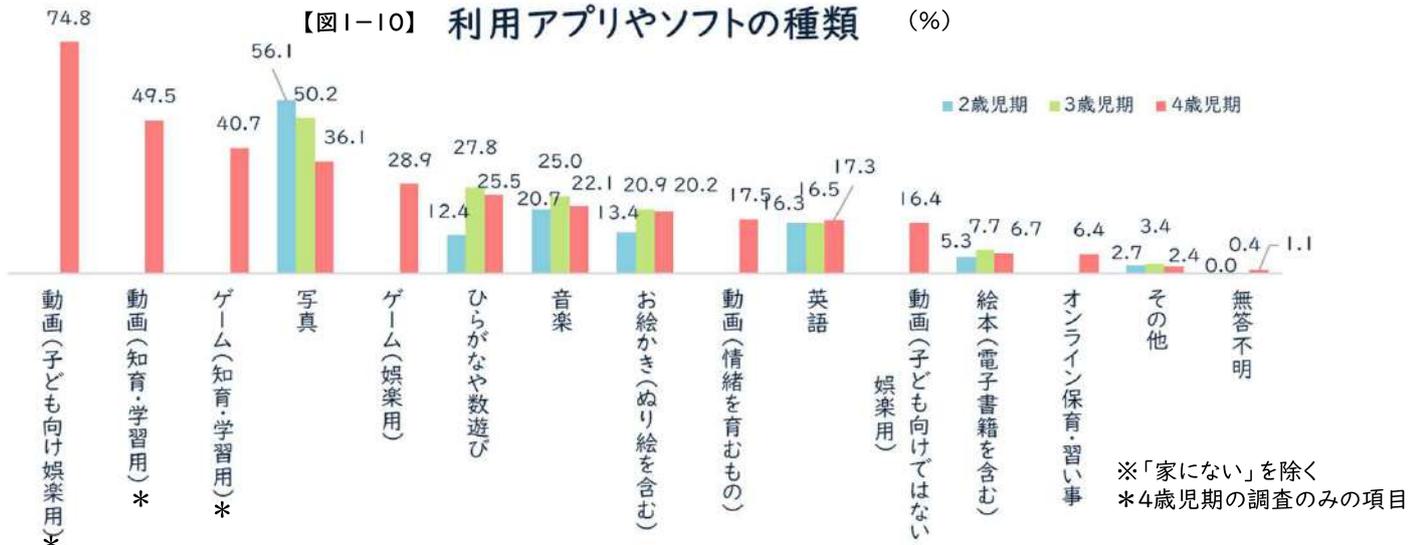
【図1-9】



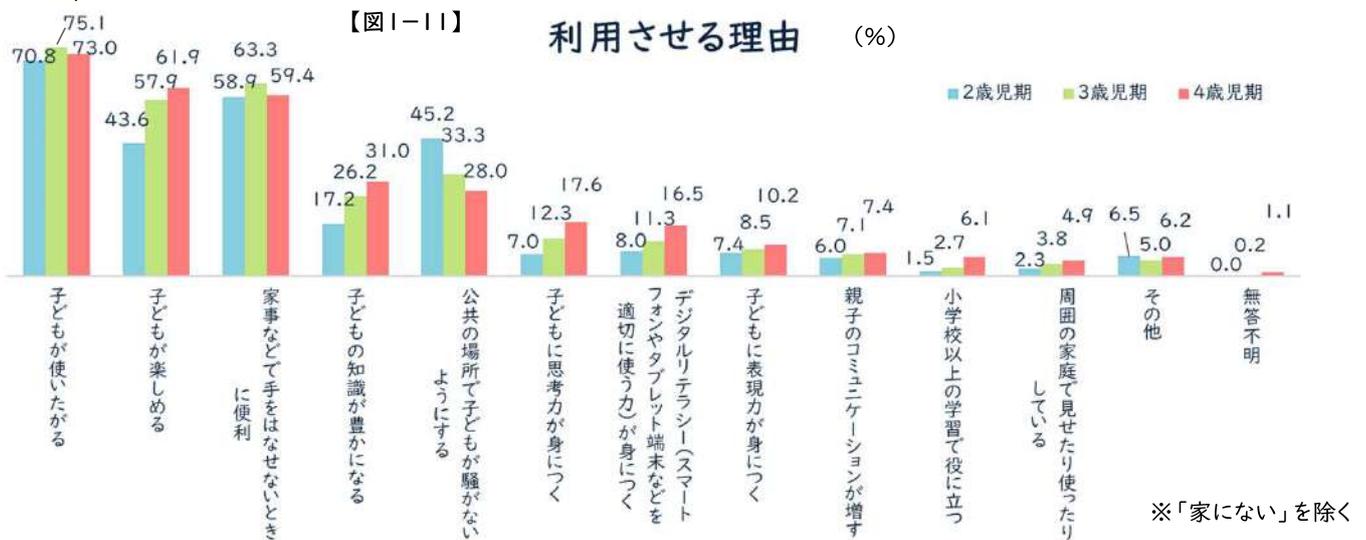
■メディアとのかかわり

4歳児期でもっとも利用するアプリやソフトは、「動画（子ども向け娯楽用）」で74.8%。利用させる理由は「子どもが使いたがるから」が73.0%だった。利用ルールでは、9割以上の親が「約束を守れなかったら注意」、「場所を暗くしない」、「大人の目の届く範囲で使う」、「画面に目を近づけ過ぎない」と回答した。

【図1-10】 利用アプリやソフトの種類 (%)



【図1-11】 利用させる理由 (%)



【図1-12】 利用時の使い方やルール (%)



■ 認知的な発達

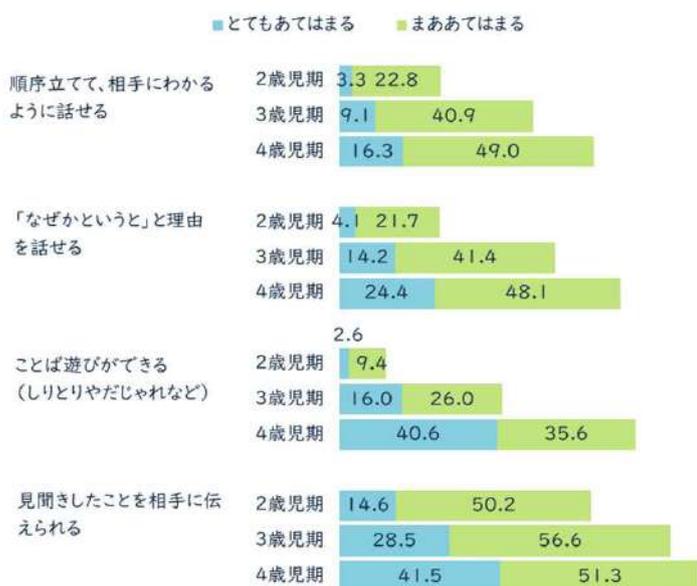
2歳児期から4歳児期にかけて、認知的な発達の変化が大きい。

「言葉」では「ことば遊びができる」が2～4歳児期にもっとも増え、語彙や表現を豊かに育てている。「文字」をみると4歳児期以降にひらがなやカタカナを読み書きしている。「数」では日常生活で自分の体や身の回りの物を使って数え、「分類」では長さや重さの順や物事の対比を少しずつできるようになる様子が見られる。

【図1-13】

言葉

(%)



【図1-14】

文字

(%)



【図1-15】

数

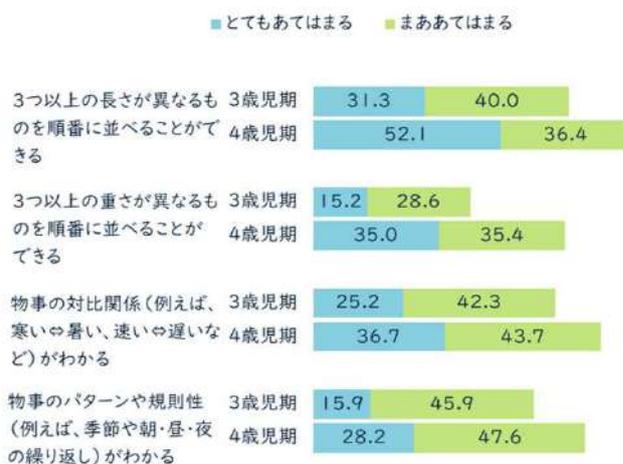
(%)



【図1-16】

分類

(%)

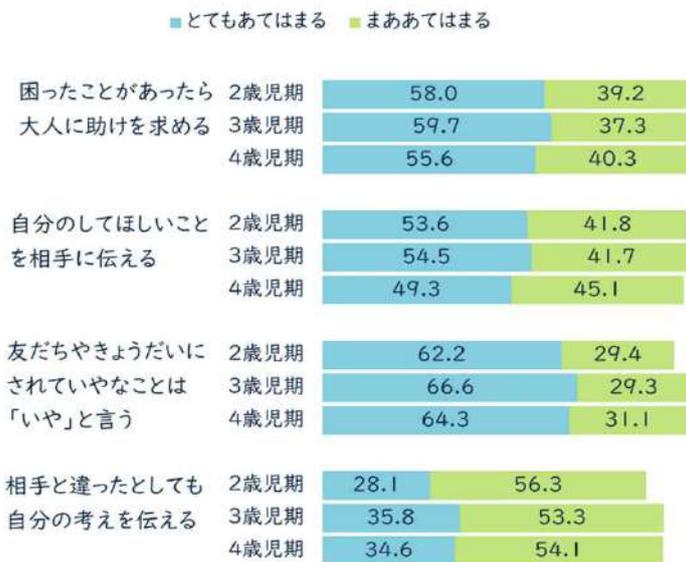


■社会情動的な発達

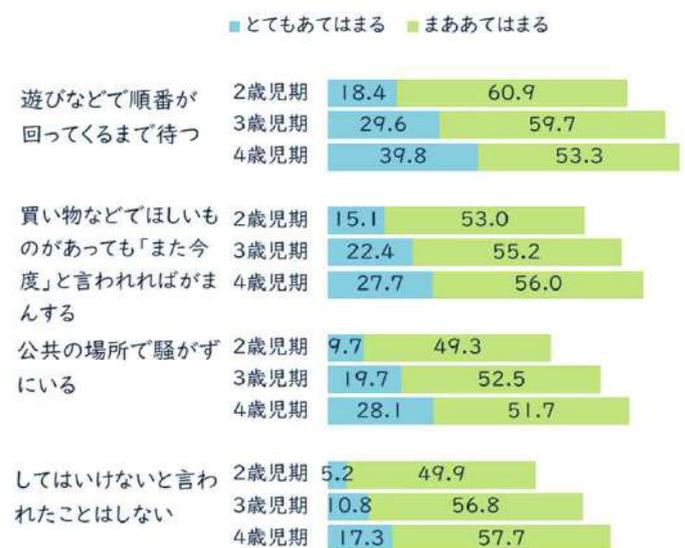
社会情動的な発達は、2歳児期から4歳児期にかけて少しずつ育っていく。

「自己主張」は4歳児期まで一貫して「とてもあてはまる」または「まああてはまる」と回答した人の割合が高かった。「自己抑制」は年齢が上がるにつれて高くなり、4歳児期で8割を超えた項目が多い。「協調性」も年齢が上がるにつれて少しずつ高くなり、他者の状況を意識した行動が少しずつとれるようになるといえる。「がんばる力」では、こだわりや自信に変化はみられないが、「最後までやり通す」や「あきらめずに取り組む」といったねばり強く取り組む力は、4歳児期までに少しずつ身につけていく様子が見られる。

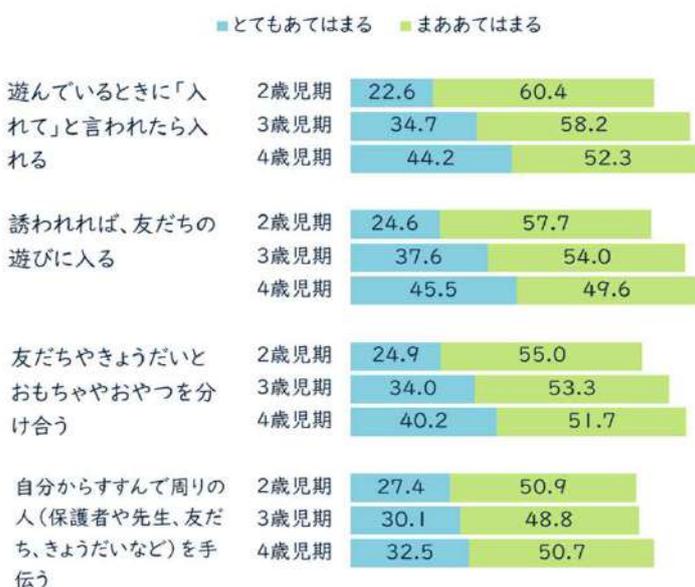
【図1-17】 自己主張 (%)



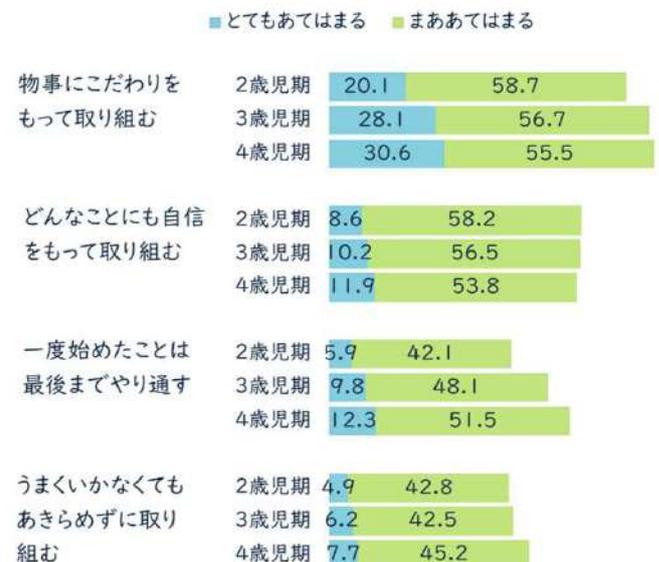
【図1-18】 自己抑制 (%)



【図1-19】 協調性 (%)



【図1-20】 がんばる力 (%)



■社会情動的な発達

「拡散的好奇心」は4歳児期までに大きな変化はみられない。「特殊的好奇心」は3歳児期と4歳児期を比べるとわずかに高くなる傾向がみられ、集中して取り組む力が育てられていると思われる。

「積極性」はわずかに高くなる傾向がみられる。とくに「遊び仲間に入るとき、自分から『入れて』と言う」では、3歳児期と4歳児期では9ポイント差があり、友だちとかかわるなかで、少しずつ自分の気持ちを伝えられる姿がうかがえる。

【図1-21】

拡散的好奇心

(%)

■とてもあてはまる ■まああてはまる

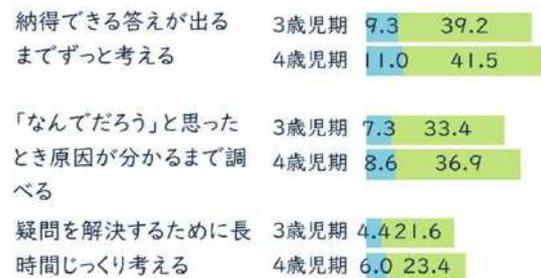


【図1-22】

特殊的好奇心

(%)

■とてもあてはまる ■まああてはまる

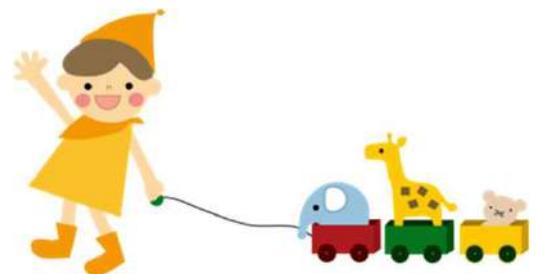


【図1-23】

積極性

(%)

■とてもあてはまる ■まああてはまる



2. 保護者の生活と子育て＜要約＞

●家事・子育ての時間 (p.14)

0歳児期から4歳児期までの変化をみると、母親の子育て時間は減少していくが、父親は変化せず、どの時期においても2時間未満が多かった。父親の平日の家事をみると、子どもの年齢が上がるにつれて、家事をする時間が増えていた。

●子育てに対する意識 (p.15)

「充実している」「楽しい」と、父母ともに9割以上が子育てを肯定的に捉えている。

●教育観・家族に対する価値観 (p.16)

父母ともに9割以上が子どもを「幼児期は自由にのびのびと遊ばせたい」と回答している。4歳児期に母親の92.5%、父親の85.0%が「家事・育児を夫婦で分担するのは当然だ」としている。

●子育ての相談先 (p.17)

0歳児期から4歳児期を通して、父母とも、子育てで「配偶者」を頼る場合が80%以上。また、母親の親族が頼りにされる傾向にある。

●保育環境への評価 (p.18)

園の評価は、4歳児期で「子どもは保育者のことが好き」が96.3%ともっとも多い。

●働き方 (p.19)

週当たりの労働時間は、4歳児の母親で「15～30時間未満」、父親で「40～50時間未満」がもっとも多い。

帰宅時間は、母親は夕方までに、父親は18時以降に帰宅するが多い。

●職場の環境 (p.20)

母親と父親でもっとも差が大きいのは「定時で帰りやすい雰囲気がある」で、4歳児期に母親87.9%、父親56.2%。

■家事・子育ての時間

平日に子育てにあてる時間は、0歳児期の母親の7割以上が10時間以上である一方、父親の7割弱が2時間未満だった。また、4歳児期の母親の6割が4～10時間を子育てにあてていた。4歳児期までの子育て時間の変化をみると母親は「15時間以上」が大幅に減少したが、父親は変化しなかった。父親の平日の家事をみると、4歳児期では「30分未満」が35.4%ともっとも多いが、子どもの年齢が上がるにつれて、「1～2時間未満」が増加し、家事をする機会が増えていることがわかる。

【図2-1】

平日の子育ての時間 母親 (%)



【図2-2】

平日の子育ての時間 父親 (%)



【図2-3】

平日の家事の時間 父親 (%)

(%)



子育てに対する意識

父母ともに9割以上が子育てを「充実している」「楽しい」と肯定的に捉えている。子どもの年齢が上がると、父母とも「自信がもてるようになってきた」が増加。否定な気持ちは、4歳児期で「子どもがうまく育っているか不安」が父母とも4割を超える。母親は「他の子と比べて落ち込む」も増えていく。

【図2-4】

子育てへの肯定的な気持ち (%)



【図2-5】

子育てへの否定的な気持ち (%)

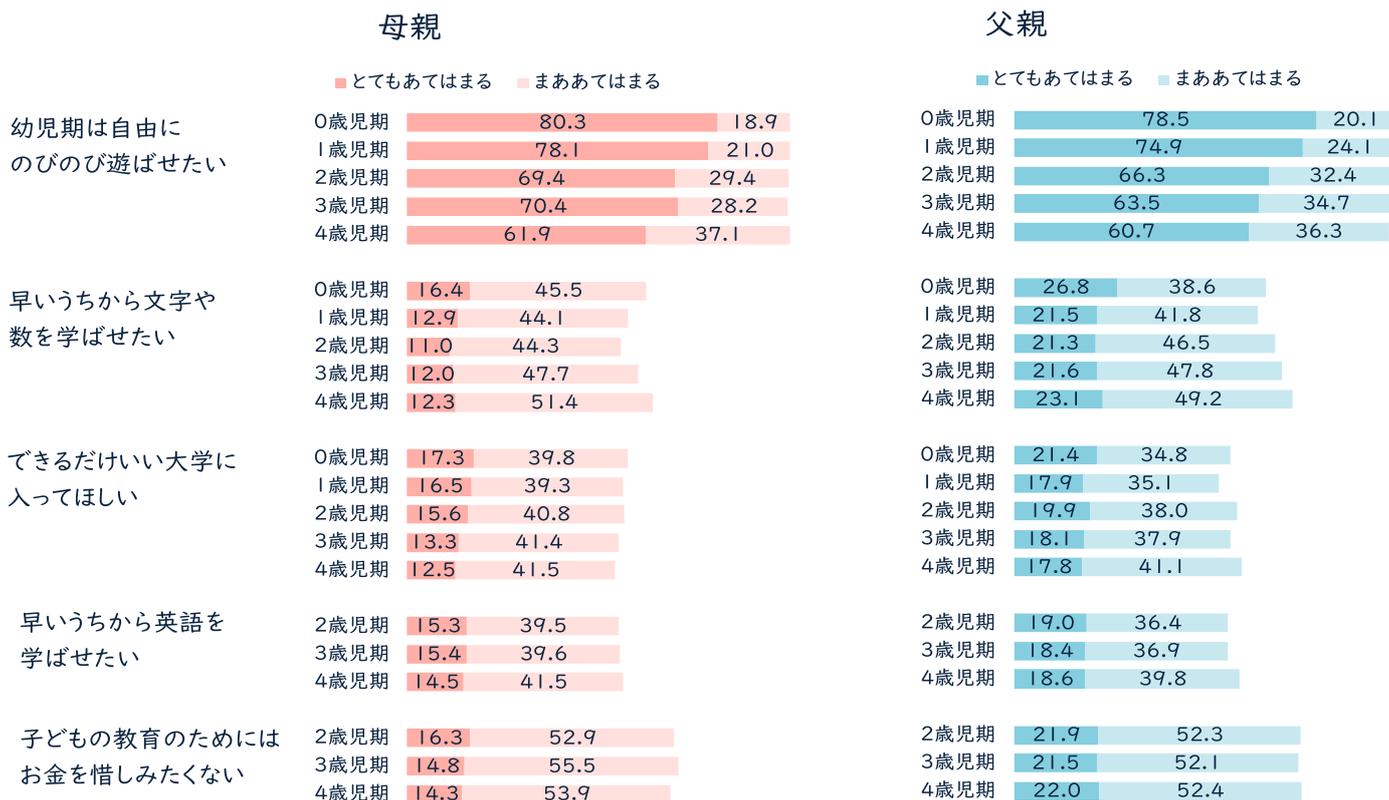


■教育観・家族に対する価値観

父母ともに9割以上が子どもを「幼児期は自由にのびのびと遊ばせたい」と回答している。また、4歳児期に母親の92.5%、父親の85.0%が「家事・育児を夫婦で分担するのは当然だ」としている。一方、父母でもっとも差が大きいのは「家族を経済的に養うのは父親の役割」である。父親自身が経済的な役割意識をより持ちやすい可能性がある。

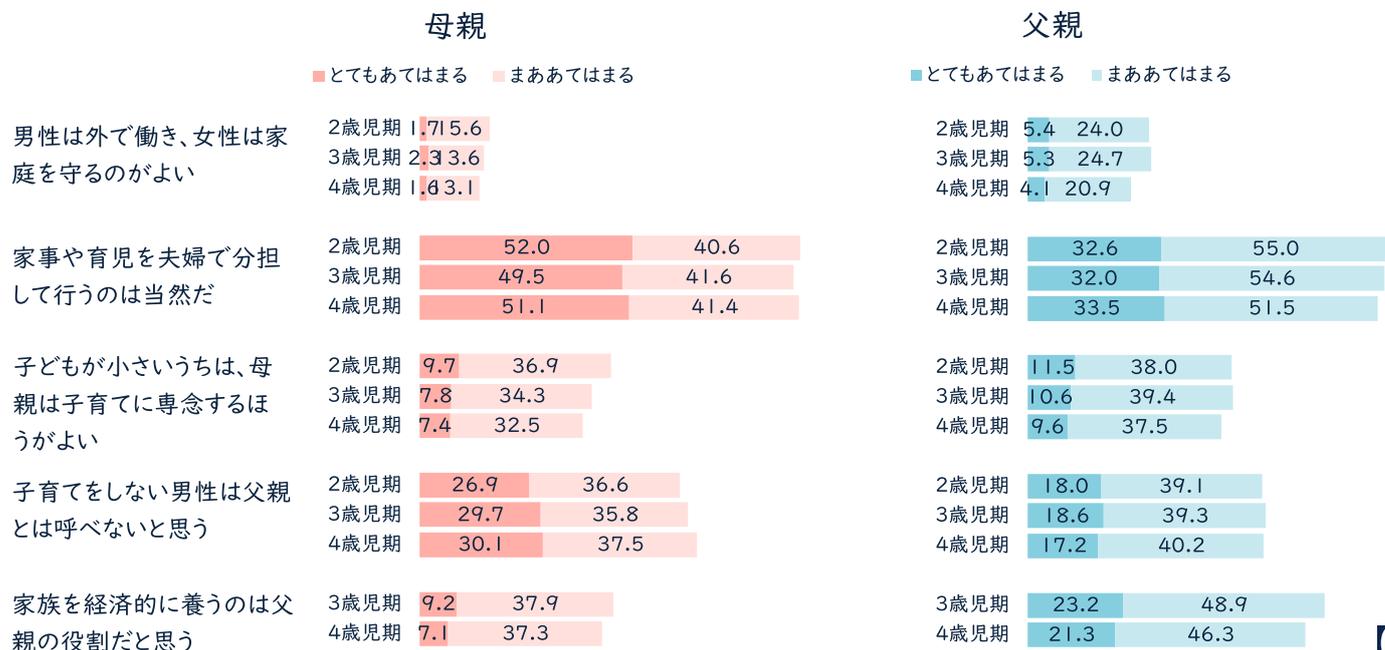
【図2-6】

教育観 (％)



家族や子育てに対する価値観 (％)

【図2-7】

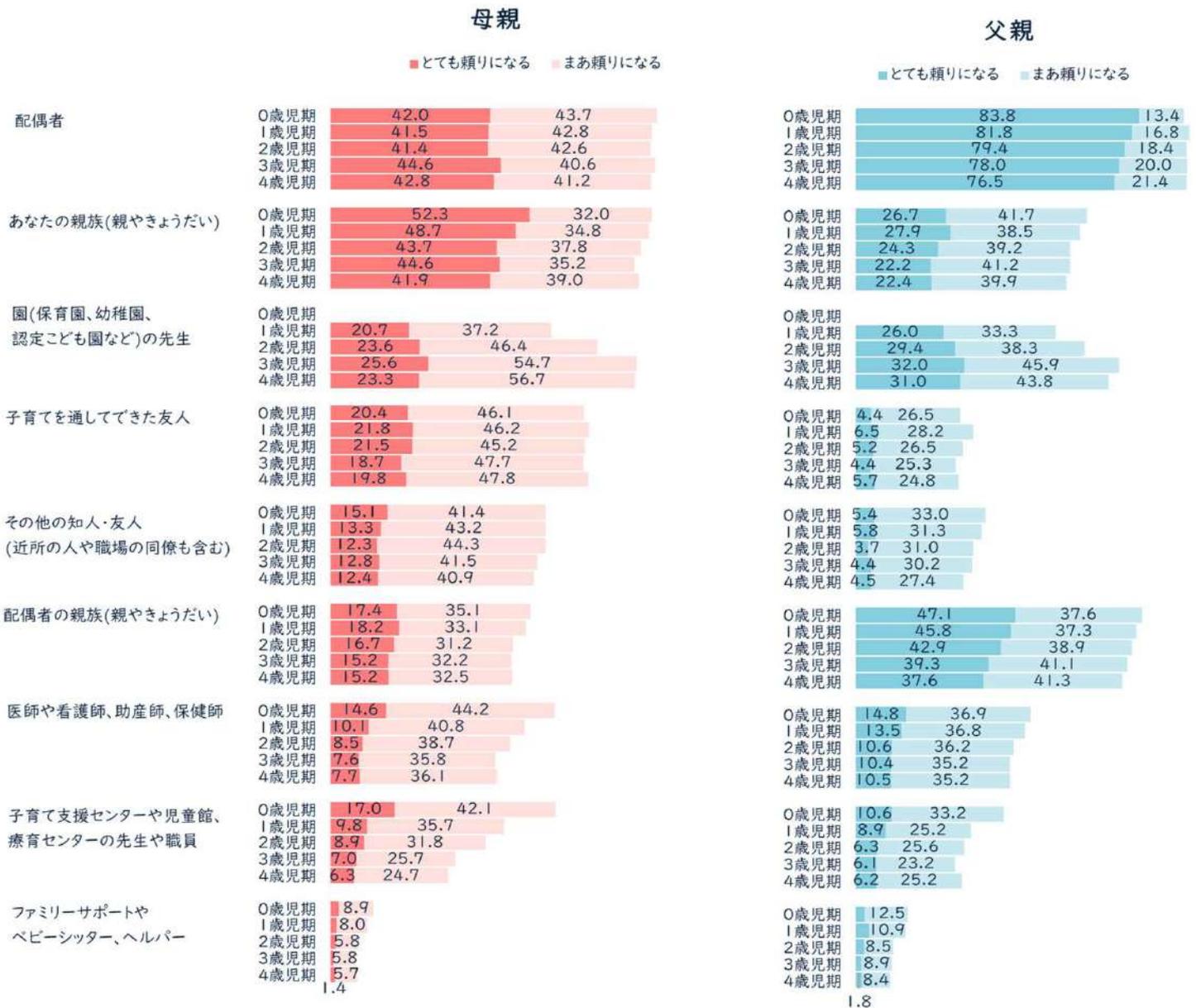


子育ての相談先

0歳児期から4歳児期を通して、父母とも、8割以上が、子育てで「配偶者」を「とても頼りになる」+「頼りになる」としている。また、4歳児期で見ると、母親は「あなたの親族」が80.9%、父親は「配偶者の親族」が78.9%と、いずれも母親の親族が頼りにされる傾向にある。

【図2-8】

子育てで頼りにしている人 (%)



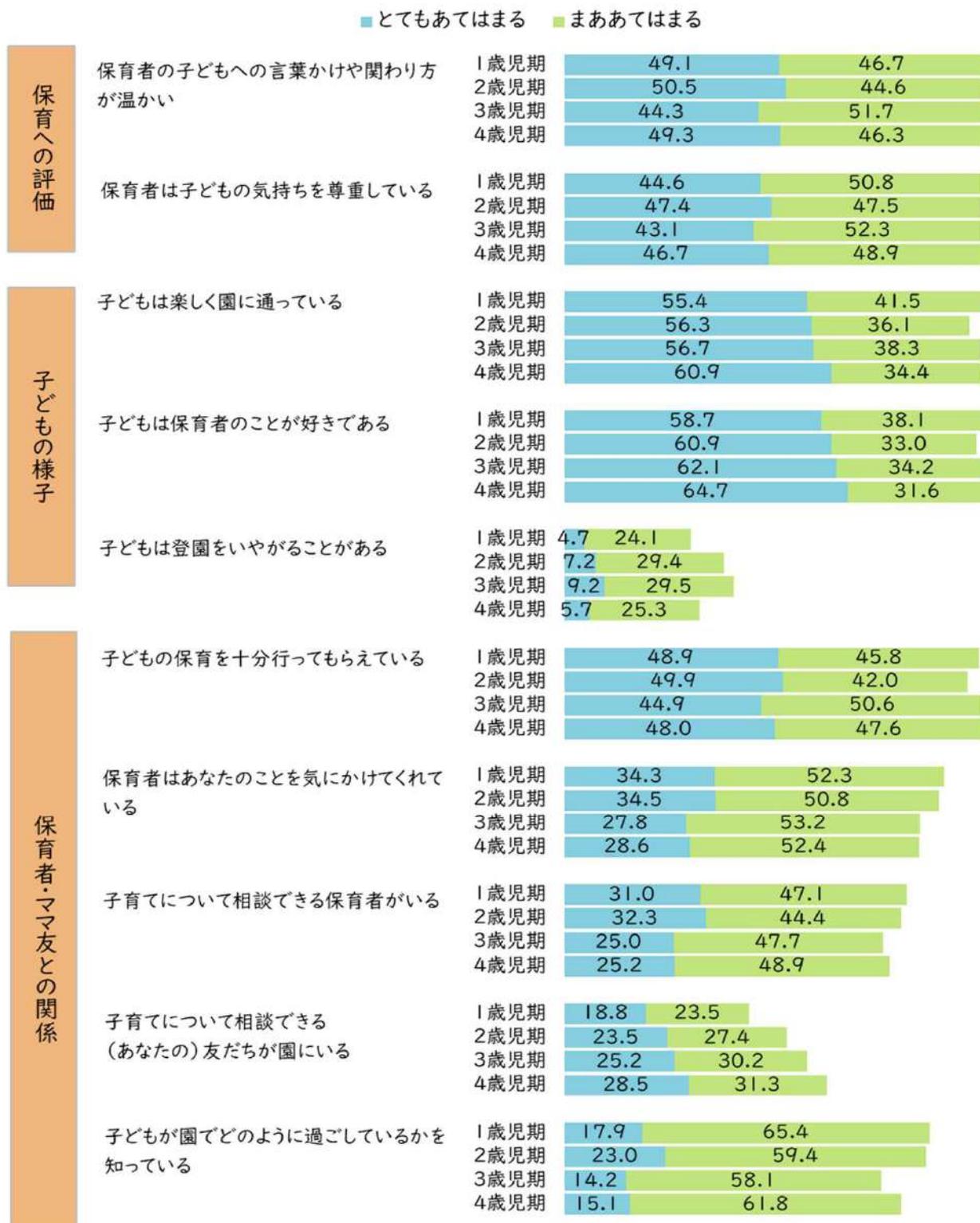
■ 保育環境への評価

園の評価は、4歳児期で「子どもは保育者のことが好き」が96.3%と最も多い。

【図2-9】

保育環境への評価

(%)



働き方

労働時間は、4歳児では、母親で「15～30時間未満」、父親で「40～50時間未満」がもっとも多い。帰宅時間は、母親は夕方までに、父親は18時以降に帰宅する人が多い。

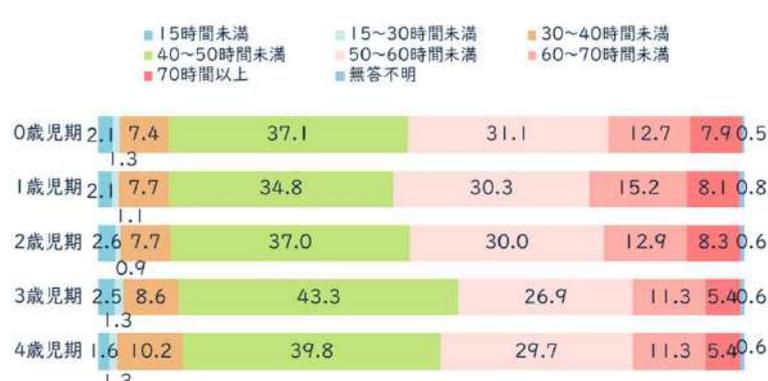
【図2-10】

週あたりの労働時間（有職者・母親）（%）



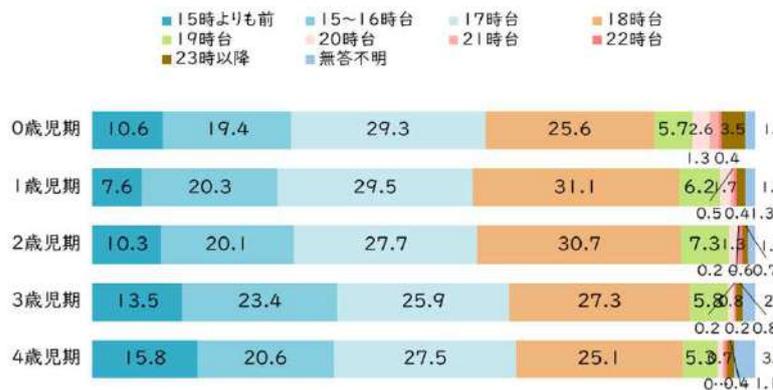
【図2-11】

週あたりの労働時間（有職者・父親）（%）



【図2-12】

仕事がある日の帰宅時間（有職者・母親）（%）



【図2-13】

仕事がある日の帰宅時間（有職者・父親）（%）



■ 職場の環境

母親と父親で差がもっとも大きいのは「定時に帰りやすい雰囲気がある」で、4歳児期に母親87.9%、父親56.2%である。父親は母親に比べて帰宅時間が遅くなりやすい傾向にあると考えられる。

【図2-14】

職場の環境

(%)



*0歳児期の調査では、母親にこれらの項目を尋ねていない。

3. 乳幼児期の子どもの育ちを支えるために＜要約＞

●保護者のかかわりと子どもの発達 (p.22)

父母ともに子どもに対して温かくかかわるという土台があったうえで、ほどよいしつけのようなかかわりをどちらかの親が担うことが、子どもの社会情動的な発達に良い影響をもつ可能性がある。

●母親と父親の相互作用の変化 (p.23)

乳幼児期の育児では、父母が相互に影響を与え合う。幼児期になるにつれて父母の相互影響は小さくなり、母親の養育スタイルが部分的に父親に影響を及ぼす。子育てを始めたばかりの時期ほど、父母に対して支援を充実させることがより効果的である。

■保護者のかかわりと子どもの発達

保護者の養育スタイルが子どもの発達にどうかかわるか分析した。その結果、**父母ともに子どもに対して温かくかかわるといいう土台があったうえで、ほどよいしつけのようなかかわりをどちらかの親が担うことが、子どもの社会情動的な発達にいい影響をもつ可能性**があることがみえてきた。

幼児期における養育スタイル (3歳児期)

養育スタイル項目

2020年度に作成・追加された
親の養育スタイルを4つの側面から捉える項目

温かい応答性

「子どもが泣いたり喜んだりしているときは、同じ気持ちになって寄り添う」
「時間があるときは、子どもと一緒に遊ぶようにしている」 ほか全9項目

攻撃性

「子どもに自分のストレスや怒りをぶつけてしまうことがある」
「子どもにイライラして、攻撃的に接することがある」 ほか全6項目

許容的で甘い養育

「子どもが何か間違っていることをしても、怒ることなく許す」
「子どもが同じ問題を起こしても、怒ったり怒らなったりする」 ほか全7項目

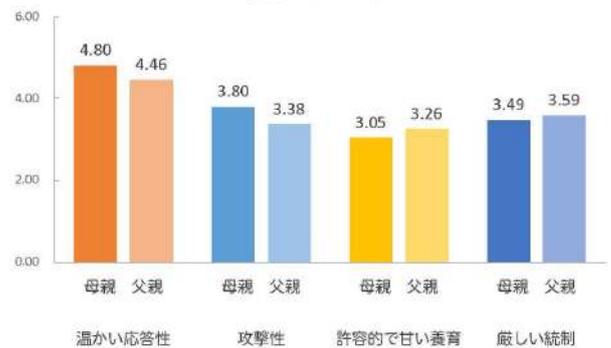
厳しい統制

「子どもにできないことがあったら、できるようになるまで何度もやらせている」
「子どもが泣いているときは、早く泣き止むよう言い聞かせる」 ほか全7項目

幼児期における養育スタイル (3歳児期)

【図3-1】

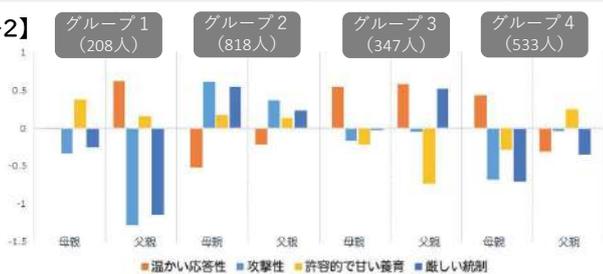
養育スタイル得点



※ 加算平均値(6点満点)
「1.全く当てはまらない-6.非常によく当てはまる」

養育スタイルの組み合わせ (3歳児期)

【図3-2】



パートナー同士の養育スタイルの方向性(高低)

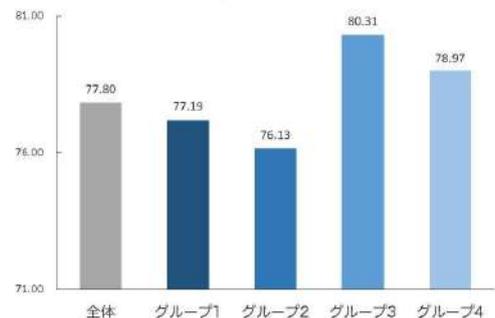
- グループ1：父親の「温かい応答性」が高い
- グループ2：全ての養育スタイルの方向性が一致
- グループ3：母親と父親の「温かい応答性」が高い
父親の「厳しい統制」が母親より高い
- グループ4：母親の「温かい応答性」が高い
父親の「許容的で甘い養育」が高い

※クラスター分析によるグループ分けの結果

養育スタイルの組み合わせと子どもの発達 (3歳児期)

【図3-3】

子どもの社会情動的な能力得点
(母親回答)



平均値
(4件法×26項目：104点満点)
「1.とてもあてはまる-4.まったくあてはまらない」
多重比較結果:グループ3>1,2 グループ4>2

■母親と父親の相互作用の変化

父母それぞれの養育行動への相互影響を5年にわたり追跡調査した。その結果、0～2歳児期の養育行動では、父母の行動が相互に影響を与え合っていた。しかし、3～4歳児期になると、母親の養育スタイルが部分的に父親に影響を及ぼすだけで、父母の相互影響は小さくなっていった。

※ 0～2歳児期は養育行動の質問項目、3～4歳児期は養育スタイルの質問項目で質問内容が異なるため、分析を分けて行っている。

(図3-4～7の矢印は、影響があることを示している。)

乳幼児期にみられる養育行動

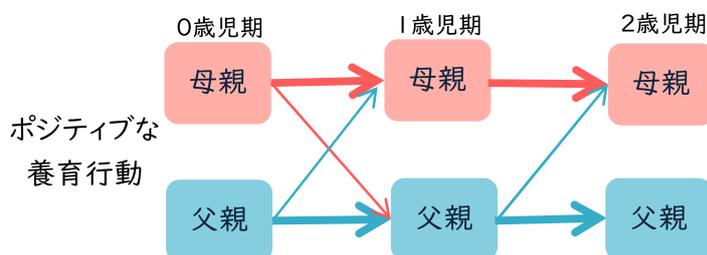


【図3-4】～【図3-7】

交差遅延モデル分析結果、有意なパスのみ表示。
太線はパス係数が0.4以上、細線は0.4未満を表す。
子どもの性別、出生順位、就園の有無、母親の就労を統制。
共分散、誤差項、統制変数からのパスは省略。

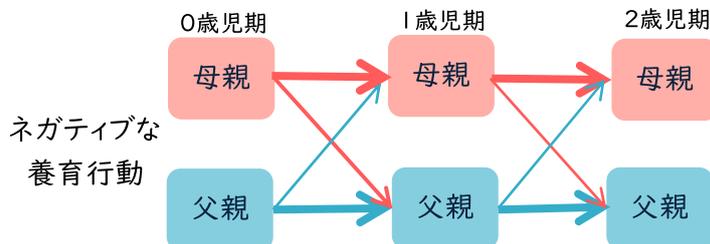
父母の養育行動の関連

【図3-4】



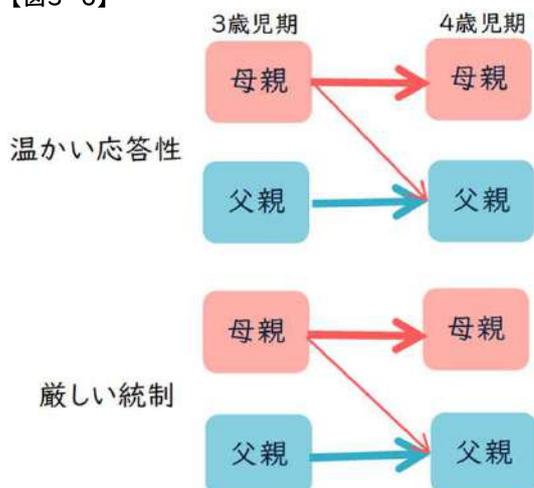
父母の養育行動の関連

【図3-5】



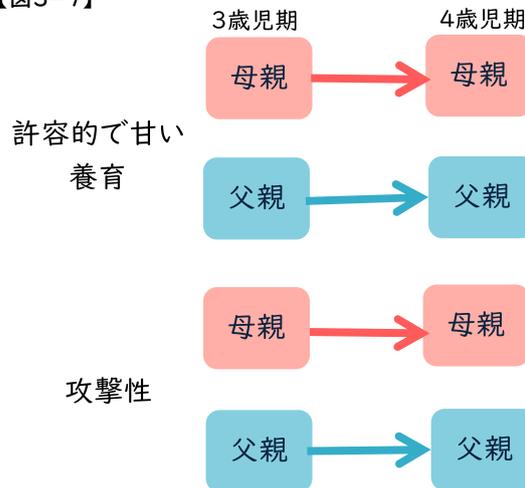
父母の養育スタイルの関連

【図3-6】

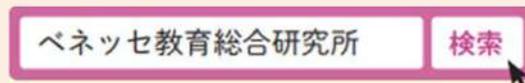


父母の養育スタイルの関連

【図3-7】



ベネッセ教育総合研究所のwebサイトのご紹介



<https://berd.benesse.jp/>



ベネッセ教育総合研究所では、各研究室の調査研究レポートと、保育・幼児教育施設、小学校、中学校、高校、大学の教職員を対象とした情報誌をwebサイトに掲載しています。

編集・発行
ベネッセ教育総合研究所

〒206-8686 東京都多摩市落合1-34

発行日：2023年7月31日

発行人：野澤雄樹

編集人：木村治生

発行所：(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

企画・制作：ベネッセ教育総合研究所

デザイン：田村徳子

©Benesse Corporation

Benesse Educational Research and Development Institute

無断転載を禁じます。

OTT001